

現地調査を積極的に展開

(令和6年7月～9月)

ホクレン委託事業に関する現地調査

(7月1日から順次)

ホクレン営農支援センターからのスマート農業技術の活用実態調査に関して、リモートセンシング・可変施肥の利用状況を全道一八ヶ所のJAなどを対象に現地聞き取り調査を実施しました。

ホクレン委託事業の中間報告

(7月3日)

ホクレンてん菜業務部からの適正な輪作体系確立に向けた輪作の実態に関する調査に関して、畑作四品の作付面積の推移とその要因、連作による病害の発生や輪作の多面的効果などについて文献調査した結果を報告しました。

自主研究に関する現地調査

(7月4日、8日)

インショップ型直売に対する産地側の組織の出荷対応に関して、石狩・空知管内のAコープ店舗運営者や農産物を出荷する生産部会の取組みについて調査しました。

ホクレン委託事業に関する現地調査

(7月16日、23～24日)

ホクレンてん菜業務部からの適正な輪作体系確立に向けた調査に関して、十勝・オホーツク管内の農業改良普及センターにおいて、連作による病害や土壌特性への影響などについて聞き取り調査を行いました。

「わがマチの自慢」に関する現地取材

(7月17日)

「地域と農業」第一三五号に掲載する予定の「わがマチの自慢」を富良野市において取材しました。

北農五連JA営農サポート協議会委託事業に関する現地調査

(7月17～19日、25日、29日)

JA地域農業振興計画の検証業務に関して、今年度実施する三JAの役職員や組合員からの聞き取り調査を行いました。

■北海道農産物協会委託事業に関する現地調査

(7月23日、27日、30日)

物流問題が顕在化する中での食品卸の役割と将来展望について、オーガニック食品などを取扱う三社への聞き取り調査を行いました。

■JAあしよろ委託事業に関わる打合せ

(7月30日)

地域農業振興計画策定に関して、部門別の課題や次期振興計画での取組みについて部課長間で共有し、総合的な事業推進方策について協議しました。

■北海道農業公社委託事業に関する現地調査(7月29～31日)

環境変化に対応した新規参入支援体制の構築に関わる調査研究で、道南エリアの酪農畜産の新規参入者に対する支援体制について聞き取り調査を行いました。

■自主研究に関する研究班会議

(7月31日)

みどり戦略に対応した新しい潮流に関する調査として、韓国のアジア農業農村研究院の金氣興院長から「韓国の有機農業における実践的な活動」について説明を受け、意見交換しました。

■自主研究に関する編集委員会

(8月7日)

北海道農業協同組合史の編集委員会を開催し、原稿作成の進捗と内容の確認を行いました。

■北海道農業公社委託事業に関する現地調査(8月7日、30日)

環境変化に対応した新規参入支援体制の構築に関わる調査研究で、道北エリアの稲作、畑作の新規参入者に対する支援体制について聞き取り調査を行いました。

■北農五連JA営農サポート協議会委託事業に関する現地調査

(8月13～14日)

JA地域農業振興計画の検証業務に関して、上川管内においてJA組合員からの聞き取り調査を行いました。

■北海道農産物協会委託事業に関する現地調査

(8月21日、22日、28日)

物流問題が顕在化する中での食品卸の役割と将来展望について、米穀卸業者、物流業者への聞き取り調査を行いました。

■JAあしよろ委託事業に関わる打合せ

(9月17日)

地域農業振興計画策定に関して、基本方針や具体策の構築、生産目標など次期計画の方向性について協議しました。

研究会・研修会等への 報告者・講師の派遣

○「令和6年度「第55期生」報徳講義」

主 催 J A カレッジ

と き 令和6年7月10日

テーマ 協同組合と報徳

講 演 石田 健一（当研究所・常務理事）

○「協同組合ネット北海道

協同学習・交流会」

主 催 協同組合ネット北海道

と き 令和6年7月19日

テーマ 協同組合論

講 演 石田 健一（当研究所・常務理事）

○「独立行政法人国際協力機構・

2024年度課題別研修」

主 催 公益財団法人北海道農業公社

と き 令和6年8月26日

テーマ 農民参加による農業農村開発

講 演 石田 健一（当研究所・常務理事）

人 事 異 動

<新 任>

特別研究員 中 平 朋 典
(8月1付)

編 集 後 記

今年も暑かったですね。暑かったのですが、昨年
に比べると我慢できる範囲
かとも思いました。

では、いつから北海道の夏を暑く感じ
るようになったのでしょうか。そこで、調
べてみました。やはり、昨年は異常に暑
かったのです。

気象庁によると、令和五年の世界の年
平均気温偏差（その年の平均気温と、ベ
ースとなる一九九一年～二〇二〇年の三
〇年間の平均気温との差を示します）は、
統計を開始した明治三四年（一八九一年）
以降、最も高くなりました。日本におい
ても、令和五年の年平均気温偏差は、統

計を開始した明治三一年（一八九八年）
以降、最も高い値となりました。（十一・
二九℃）

日本の平均気温は、長期的には一〇〇
年あたり一・三五℃の割合で上昇してお
り、特に一九九〇年代以降高温となる年
が多くなっており、産業化（農業的社会
から工業化に代わるプロセス）との関連
があるのではとわれています。

また、令和五年は日本近海の海面水温
も高い状態となっており、月平均海面水
温はすべての月で平年より高くなりました。

特に九月は平年差十一・六℃となり昭
和五七年以降で、最も高い海面水温でし
た。

実は、二〇二〇年までの一〇〇年間で
日本近海の海水温は一・二四℃上昇して
おり、日本の漁獲量は二〇一四年比で五
二万トン減少しています。

なかでも、サンマ、スルメイカ、サケ
の三種は二〇一四年から約八割減の一
〇・八万トンに急減しています。